

1945(昭和20)年の8月6日に

齋藤シヅ子 (当時22歳)
深川市



初めて私の体験を話します。私は爆心地より2.8km、高須駅の裏手の古江で被爆しました。私が22歳の時でした。8月6日、お客さんのワンピースが出来上がり7時30分位に取りに行くと言われていたので、私はいつもより早く起きて外に出てみました。すると雲一つない素晴らしい青空に飛行機が一機空を飛んでいます。写真を撮りにきたのだろうか？はじめは警戒警報も鳴らないのでジッと空を見つめていましたが、まもなく警報が鳴り、飛行機は姿をかくして警報も鳴り止みました。

8時過ぎ、また飛行機が姿を現して飛んできます。ちょうどその時、飛行機から青い光を放ちながら何かが落ちてきました。紫色のかたまりが静かに降りてくる感じでした。焼夷弾だと言いながら私は家の方に帰ってきました。ところが家の納戸の棚の上に納めてあった大きな釜が落ちて土間にころがっているのです。私と妹は驚いて手を握り合って外に飛び出しました。

朝8時過ぎだと言うのに空は真っ暗になっています。外にはおじいちゃんが立っていましたが、暗くてはっきりとはわかりません。ジッとしていたら少しずつ明るくなり、やがて人の動きが見えるようになりました。近くで火事が出ていました。私はバケツを持って走りました。火事はおさまりましたが、いろいろな人が次々こちらに向かってきます。水!!水!!と叫びながら次々と走ってきます。おそらく学徒動員の中学生だと思いますが痛々しい恰好をしています。「どうして焼けているところへ入って消化したの」と言うと、「違う、立っていてこのようになったのだ」と言います。服は焼け腕も真っ赤に焼けてだれています。私は私の上着を着せてやり、五日市への道を見つけてそこへ行くように伝えました。

次から次へと行列が出来ました。集合場所が五日市ということで、傷ついた人々が列をなして歩いてきます。ほとんどの人が焼けた服を体に付け、何とも痛々しい限りです。でもどうすることも出来ずただ見守るだけでした。

私と妹は近所の方々と土を掘り水を出す準備をしました。有難いことにどうやら水も出はじめました。私たちは隣の窪田のおばさんの家に行き、夕食を御馳走になりました。その日からそでご飯を食べるようになりましたが、いつまでも世話になることも出来ません。そこで向原の伯母の所へ行くことにしました。11里も歩いて向原に着きました。妹は身体中に発疹ができて熱もあります。私も風邪をひいたみたいに熱が出てきました。おそらく原爆症にかかったのでしょうか、お互いに傷ついた身体を支え合い、途中何度も休みながら手をつないで歩きました。原爆で傷んだ橋はどこも危なくて渡ることはできません。手助けの人がいる橋を渡るには3円かかります。私たちは身体も弱っていて無理も出来なかったので、お金を出し手伝ってもらって橋を渡りました。

この混乱のさ中でもお金を払えば手伝って橋を渡らせてくれるという、日本人にはない異国の人のたくましい振る舞いに、私はただただ驚いていました。でもそのお蔭で私たちは助かったのです。もっとも高須の駅の待合所には「国破れても山河あり 今後の指揮は余が行う 暁部隊長」と貼ってあり、それを見てすごく心強かったことも覚えております。

私は北海道に生まれ、小学校は美瑛でした。6年生を終了してから、旭川の女学校へも通わせてもらい幸せでした。女学校は汽車通学でしたが、女学生専用車があり4年間で卒業しました。ところが、間もなく弟が病気になりました。暖かいところで療養させようと考えて、一家は父母の出身地の広島へ移りました。私たちはそこで被爆したのです。私は戦後北海道に帰ってきました。しかし、体調がおもわしくなく、数限りなく病気をしましたし手術もしました。今も心臓病で通院しています。

もう過ぎたことではありますが、それが原爆だと知ったのは随分後になってからです。早くにわかっていたら何か対処の仕方があったかもしれません。ですから、戦争は絶対にしてはなりませんし、核兵器を使うということは決して許されることではありません。